

信州アーツカウンシル オープンカウンシル! vol.7
2025(令和7)年8月21日(木) 犀の角(長野県上田市)にて

ARS LONGA PROJECT

ARS LONGAプロジェクトは、信州アーツカウンシルの取り組みです。
<https://shinshu-artsCouncil.jp/arslonga>



登壇者

- 宮城 潤 …… NPO法人地域サポートわかさ/那覇市若狭公民館
武捨 和貴 …… NPO法人リベルテ
直井 恵 …… NPO法人アイダオ/NPO法人上田映劇
福澤 信輔 …… 長野県社会福祉協議会
[同会] 野村政之 信州アーツカウンシル

民間非営利団体による中間支援 文化芸術と社会教育

信州アーツカウンシルが支援している民間非営利団体は、文化芸術の場を開くことを通じて、地域住民の支援や、福祉/教育/多文化共生など他の分野の支援への繋ぎ役を担う場合があることに着目し、那覇市若狭公民館の宮城潤さんをゲストに取組を紹介いただきました。

自己紹介

宮城 はいさい。こんにちは。那覇市若狭公民館の館長をしています。詳しい自己紹介はまた後ほど。どうぞよろしくお願ひします。

武捨 NPO法人リベルテの代表をしています。リベルテは2013年から障害福祉事業をベースに、施設に來ている利用者の人たちや地域の人たちと一緒に、文化芸術活動や地域活動をしていこうという、文化的な事業をやっています。よろしくお願ひします。

直井 直井恵と申します。NPO法人アイ

ダオとNPO法人上田映劇の2つのNPOで「うえだ子どもシネマクラブ」を行っています。上田映劇は、築108年を迎えた映画館ですが、「うえだ子どもシネマクラブ」では「学校に行きづらい日は映画館へ」というコンセプトで、学校に行かない子たちへ映画を見に来てねっていう呼びかけをして無料上映会をしています。あと、通常上映の日も映画館の仕事を手伝ってもらったりして受け入れをしています。始めてから6年経って、課題がすごくたくさんあるんですけど、なんとも継続して運営している場をやっています。よろしくお願ひします。

「地域福祉」を推進している団体です。全国社会福祉協議会が東京にあって、都道府県ごとの社会福祉協議会があり、市町村ごとにもひとつずつあります。私自身は今、長野県社会福祉協議会で福祉人材確保の仕事を担当しています。

福澤 長野県社会福祉協議会に所属しています。福澤信輔と申します。社会福祉協議会というのは、

高年齢だつたり障がいのある人たちと地域の中で一緒にどういうふうな暮らしをしようか、ということを考えています。よろしくお願ひします。

公民館とは何か 若狭公民館のある地域

宮城 改めまして宮城です。わたしは沖繩県立芸術大学で彫刻を勉強して、そのあと最初は「前島アートセンター」というNPOを立ち上げて活動していましたが。並行して若狭公民館にアルバイトで入ったんですが、今公民館勤務20年目になっております。

はじめに、公民館って何なのか、をおさらいすると、今ある形の公民館の原点は第二次世界大戦の敗戦なんです。郷土が疲弊して、自分で自分たちで持つてくる技術とか知識とか、そういうものを持ち寄って生活課題、そして地域課題に対応していこう、と。その学びの場や、実践する拠点として公民館って

うのが構想されて、社会教育法で位置づけられて広がっていったという経緯があります。

公民館が全国に広がった頃、「全国公民館連合会」というところが「公民館のあるべき姿と今日的指標」を出すんですけども、そこで言われている公民館の理念は、公民館活動のベースは人間尊重の精神にある、と。国民の生涯教育の体制を確立し、究極の狙いとして、住民の自治能力の向上、というふうに向かっています。そして公民館の役割は集会和活用、学習と創造、総合と調整、これを分かりやすくして「つどう・まなぶ・むすぶ」と言われています。

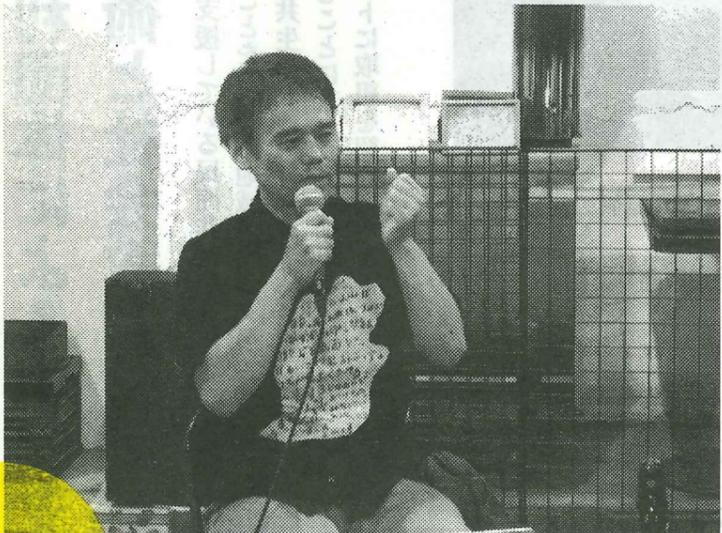
これからお話しする

若狭公民館の取り組みは、ここを非常に重要視しています。ちなみに若狭公民館は、文部科学省が決める優良公民館表彰「最優秀館」など、様々なコンクールで日本一に合計9回選ばれているんですね。拍手してもいいですよ(笑)(拍手)

若狭公民館の取り組みは、ここを非常に重要視しています。ちなみに若狭公民館は、文部科学省が決める優良公民館表彰「最優秀館」など、様々なコンクールで日本一に合計9回選ばれているんですね。拍手してもいいですよ(笑)(拍手)

若狭公民館が対象としているのは大体小学校4校分ぐらいのエリアですね。2万1000世帯。海沿いにある地域で、琉球王朝時代から海の玄関口として栄えた地域。沖繩の場合は米兵が入ってきて都市を接収されて地域住民が追い出されたっていうことがあるので、戦前から古いコミュニティは解体されています。さらに戦後、かなりいろんなところから人が流入してきています。

若狭公民館が対象としているのは大体小学校4校分ぐらいのエリアですね。2万1000世帯。海沿いにある地域で、琉球王朝時代から海の玄関口として栄えた地域。沖繩の場合は米兵が入ってきて都市を接収されて地域住民が追い出されたっていうことがあるので、戦前から古いコミュニティは解体されています。さらに戦後、かなりいろんなところから人が流入してきています。



宮城潤さん(NPO法人地域サポートわかさ/那覇市若狭公民館)

若狭公民館が対象としているのは大体小学校4校分ぐらいのエリアですね。2万1000世帯。海沿いにある地域で、琉球王朝時代から海の玄関口として栄えた地域。沖繩の場合は米兵が入ってきて都市を接収されて地域住民が追い出されたっていうことがあるので、戦前から古いコミュニティは解体されています。さらに戦後、かなりいろんなところから人が流入してきています。

トーク全編の記録映像がご覧いただけます

パーラー公民館

宮城 「パーラー公民館」は、賑という地域に出向いてつて公民館活動をするという取り組みです。若狭公民館のエリアは結構広域で、

公民館から曙までは歩いて1時間ぐらいかかるんですね。そうなるので公民館がほしいうつていう声が聞こえてきます。今、機能して

怪しい公民館がいくつかある中で、公民館を熱望されるって、ひよつとしたらここに新しい、本質的な可能性みたいなものがあるんじゃないか。それを切り開けようチャレンジでした。

公民館見えますか? : : : そう、公園に、パラソルと、黒板が天



板になっっているテーブルを置いて、公民館だつて言い張る活動を始めました。「立派な建物がなくても役割が發揮できれば公民館って言えるんじゃないか」という発想です。この公園に置く設えは市販品の組み合わせなんですけど、考えたのはアーティストの小山田徹さんです。



現場に立ち会うスタッフには「何もしないでね」ということをリクエストしていただきました。何もしないって結構難しいんですよ。月に1回程度、アーティストのワークショップがあつて、それ以外の開館日は何もしない、何も無い。でもワークショップがあるの、「何かしたいね」とか、「あの人こんなことができるらしいよ」みたいなおしゃべりが生まれてくるんですね。そこでうちのスタッフは、その地域の

人たちの話にとにかく耳を傾けて、地域の人たちがやりたいっていうことの後押しをする。そんな感じでしょうか。そんな事業が生まれ、だんだん地域の人たちがこの場を使って何かをするっていうような感じに変わっていききました。子どもたちも公園で遊ぶのと遊び方は変わらなはずなのに、なんか



楽しんでくれたり。この事業は当初、沖繩アーツカウンシルの支援を受けていて、助成がもらえるのは3年までと決まっていたので、曙の皆さんに「いずすよ」と言っていました。最初、地域の方は「引き継げないよ」と言っていたんですけど、3年目になって、本当に何もしないんだと分かるので、助成が終わった後も自分たちは続けたいということ。で、月に1回程度なんですけれども、

「立派な建物がなくても役割が發揮できれば公民館って言えるんじゃないか」

アートな部活動

宮城 では次のお話。「アートな部活動」についてのお話に入っていくかと思えます。

アートな部活動は、コロナ禍に生まれた活動です。コロナのとき結構いろいろ大変だったじゃないですか。すごく社会が不寛容であるという状況が見えてきていました。

そういった中で公民館で活動しているサークルの皆さんは大変な状況でもお互い気にかけていたりして、そういう小さいコミュニティのあり方ってすごく頼もしいなっていう印象を受けたんです。でもコミュニティってすごく閉じられたもので、そこに属してない人の状況って見えないじゃないですか。だから小さいコミュニティを大事にしながら社会に

も開かれた、新しいコミュニティを作れないかなって思ってたのが「アートな部活動」です。

代表的な3つを紹介しましょう。

まず「ダンボール部」は、アーティストの儀間朝龍(ぎまともたつ)さんに協力していただいた、ダンボールを活用したワークショップです。地域で海岸清掃とかをしている子どもたちを中心に関わってもらったのですが、段ボールで水に濡らすと3枚の紙に分かれま

なったダンボールを使って作品を作り、発表会と称してホテルで販売して売り上げたものを海岸清掃の資金にそのまま回すみたいな、地域内循環っていうのをやってみようという取り組みでやったものでした。

もうひとつは「ポストポスト部」です。コロナのとき、オンラインツールが使えない子どもや高齢者は特に人とコミュニケーションが取りづらいという状況がありました。そういった中で、スローでアナログなコミュニケーションが取れるようなものを作ろうって生まれたのがこれです。若狭公民館の前でつかいポストを置いておいて、そこに何か投函してもらいます。投函するのは絵とか写真とか手紙とか何でもいんです。そうして投函された何かに、面白く返事を考えるという部活

動です。公民館の前に返事を掲示板で掲示して。すごくスローでアナログな感じなんですけど、そこでもいろんなものがやっぱり投函されるんです。



民間非営利団体による中間支援
～文化芸術と社会教育

軍にいた頃の、1000年ぐらい前の沖縄の絵葉書を送られてきたんですよ。若狭公民館の近くなんです。その場所

に古地図を見ながら行って再現して写真撮って、それを掲示板に貼るとか。

あと「ユーチュー部」という部活動もあります。コロナのときに、外国籍、外国にルーツを

持つ留学生とかが結構大変だったんですけど、地域の中にこういう人たちもいるよねっていうことをちゃんと見える化して、映像を通して交流できるような場を作れないかなっていうこと考えたのがこのユーチュー部です。東京在住のアーティストの藤井光さんに協力してもらいました。文化背景や育ってきた環境が異なると、同じ景色を見てもその捉え方が異なるんじゃないかなっていうところ、沖縄、那覇の好き

アートによって感性が揺さぶられる、そして新しい自分に出会う。

文化共生の取り組み

宮城 外国人が急に増えたことに対して、地域の方から不安の声が聞こえてきたんですね。そこでお互いどうにか交流して分かり合えるような場を作りたいよ

なっていうことで、多文化共生の取り組みが始まりました。初期に始めたのは「ネパールニューイヤーパーティ」というイベント

ネパールのお正月、4月の中旬にあるんですよ。そして今ネパールの暦で何年か? 2082年なんです。びっくりじゃないですか。身近にいるけれども意外と知らない。そこで、イベントを一緒に作っていくことを通じてお互いが分かり合えるようなことをやっています。その活動を繰り返していくと、地域の活動に留学生が



関わっていくような場とかもどんどん出てきました。

コロナのとき、留学生は大変だったんです。彼らがアルバイトしているのは飲食業とか観光業が多く、コロナでバイト先がなくなる。日本語学校も休校。渡航制限があつて本国に帰るこ

ともできない。すごい困窮してる。その状況に気づくのはやはり当事者たちなんです。でも寄付を募ったりとか、物資を集めたりとかしても、それをさばいたり配る拠点が無い。公民館は休館中だったんです。けど、場を開いて物資を仕分けしたり配布したりするのをバックアップしました。

そうこうしているとネパール

者とのネットワークを作りたいっていう相談があつたので、警察、行政の担当課ほかいろんな人たちを呼んで非公式で情報交換をする場を作りしました。

若狭公民館がネパールの人たちといる交流しているっていう話

社会教育・生涯学習、アートは近い

宮城 公民館って生涯学習の場だと一般的には定義されてるんですけど、生涯学習ってつまり社会状況とかライフステージによって学び続けることですよ。つ

ながらその先を考えること。そうするとどんな活動が展開していくんですよ。新しい課題も見えてくるんですけど。

宮城 公民館って生涯学習の場だと一般的には定義されてるんですけど、生涯学習ってつまり社会状況とかライフステージによって学び続けることですよ。つ

える場が作れる可能性があるがあるんじゃないかなと取り組んでおります。

パートナーがいるんです。多様な主体と協働しているところがポイントかなと思います。その上でこんな課題があるよとか、こんな魅力があるよとか、何かアクションを起こすことによつて旗を立てる。地域の人

が気づいていないものに対して、地域にはこんな人がいるんだ、こんな困りごとがあるんだなつていうのを意識してもらおう、想像力を働かせてもらえるようになればいいなと。

スタッフとビジョン目線を合わせるか

武捨 運営的なところでお聞きしたいのですが、企画提案してプロジェクトが広がっていくときに、宮城さんはどんなふうに見守っていますか。加えて、プロジェクト内容をアーティストにお願いするときの関わりについて、手放しすぎてもいけないし、入りすぎてもよくない、そのバランスをどうされているのか、気になっています。

宮城 私、いろんなことがちゃんとできない人なんです(笑)。やりたいと思ってるんですけど、できないんですよ。誰かと話をしていると盛り返がって「これやろうー」みたいなことが多いんですけど、「任せていてもできないね」ってみんな気づいてくれてますね。なので、「私に期待しないでください」っていう感



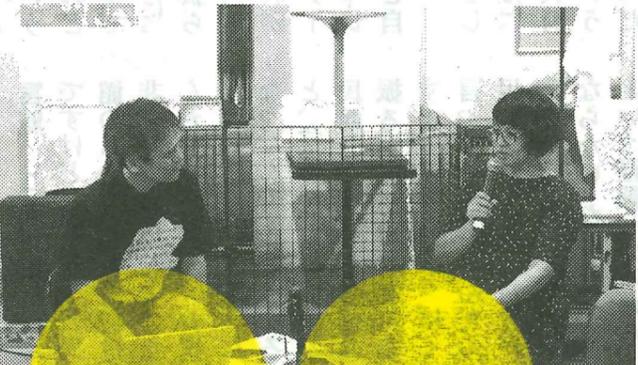
なかなかうまくいかないことも多いんですけど、頑張らないけど諦めない」

持っています。同じ地域の中で居場所がひとつあればいいっていうことではなくて、居場所って空間じゃなくて、そこにいる人間関係で居場所ってできるじゃないですか。ということば、そこにいる人、例えば友達と喧嘩したらそこに行きづらいたいなこと

るっていうことを意識的にやっています。なかなかうまくいかないことも多いんですけど、私は座右の銘というか、「頑張らないけど諦めない」というのを大事にしているんですね。頑

けどいつかは、と思つてずっとしぶとくやっていく。手ごわいなとは思いますが、一つひとつの信頼関係を作つて重ねていくように、ちよつとずつ学校に関わつていっています。

地域の中では公民館、児童館、それ以外にもいろんなコミュニティがあつて、学校もあつて、そこちやんと情報共有ができる場を作るようにしています。お互いがやっていることを見えるようにす



張つて繋げようとか課題解決しようつてやるよ、どうしても歪みが生まれたり理解し合えない感じになるので、張らない。けど、諦めないですよ。頑張らない

じのスタンスです(笑)。

武捨 なるほど。なぜその辺が気になったのかと言うと、自分が13年間、代表理事をしていて、「リベルテ」自分」になつてきてるところが、ちよつと違ふなと思つていて。自分では、大きな粒の集まりのうちの粒のひとつでしかないと思つているんだけど、外から見たときには、僕が全体をプロデュースしたみたいに見える。どうやってそこを「みんなも一緒に」みたいな意識に変えていけるのかな、と。

宮城 そうですね。それで言う公民館のスタッフとどう意思疎通を図つたり、目線を合わせていくかは結構大変で。その場では発言していかない狙いみたいなことが意外と伝わってないこともあるんですね。この数年は意識

して、みんな話合ふ中で、こういうことが必要だね、と気づく場を作っています。私が思っていることをスタッフが受ける、の

はなく、自分たちで考えて私が思いつかないようなことを工夫し始めています。そのへんはだいぶ前進している感がありますね。

学校教育との関わり方 アートの活かし方

直井 うえだ子どもシネマクラブと公民館との違いは、「学校の代わり」というのを謳つてしまつたということがあつて、けっこう学校教育とのせめぎ合いになつてしまつてい

学校教育では「こういう答えを導くために組み立てる」つてなつて、そこが全然違う。教育的に映画館が居場所となる、なり得る、ということを対話してきたのですが、その先の目的を共有するのが難しいと感じています。

意図している「教育」や「学び」がそちらに近いと感じて、学校などの教育の実態は、逆方向を行つている感じがしています。

アートの「作品や現実の解釈をどう開いていくか」つていうことをやろうとしているけど、

宮城 学校教育と社会教育つてやっぱ違いますよね。文科省は方針を変えると舵を切つているけど、現場は変わらない状況があるかなと。

実はうちのNPOは、公民館と児童館とふたつの指定管理を

繋げていくつていうようなことはよくやっています。そういう時に、既存の取り組みの枠を超えていくのが得意なアーティストの方を借りてやるのが多いんですけど、同時に、アトじゃなくてもいいと思つていて。この状況がより楽しくなるというか、少しでも前に進むつていうことであれば、手段も手法も何でもいい。ただ、私はこれまで関わってきたのがアト系の人が多かったら面白くありません。アトの人に関わつたら面白くない。アトの人に関わつたら面白くない。アトの人に関わつたら面白くない。

**相談者の主体性と
支援者の振る舞い**

福澤 お話を聞いて、東日本大震災の後、放射能で住めなくなった沿岸部の皆さんが集団で避難して避難所になった話を思い出しました。

最初はまだ本当に殺伐とした雰囲気だった避難所の一角に、机とコーヒーターと椅子を置いておいたら、そこで昔喫茶店でお父さんがコーヒーターを入れて始めた。紙コップで最初出していったんだけど、紙コップじゃ味気ないよねつて言つて、自分たちが作つた陶器のコップを持ってきてコーヒーターを入れて始めた。さらにそこに避難している人たちが殺風景だからとちよつと花を持ってきたみたいな。

宮城 そうですね。パーラー公民館をやるにあつて、前提として、私たちはハードのある、いわゆる公民館然

とした若狭公民館で活動してるとっていうことがあつて、だからこそできることと、そのせいでやりづらいことがあつたと思つていて。いろんな人の意図しない学びが生まれる場をOSとして作りたいていう思いはあるんだけど、どうしてもこれまでの公民館のありように、私たち自身も引つ張られていました。でもパーラー公民館だとそれが無いところからスタートできるっていうチャレンジだったので、割と自由によれたんです。

そのチャレンジをしたいつて思つたときに、うちのスタッフに共有できていたかつていうと、できていなくて。だから「何もしないのでね」つて言つたときに最初は全然意味が分かっていませんでした。でも色んなことが起こつていくと、なるほどこれがしたかつたんだなつて実感として気づいて

いった、という感じですね。

福澤 なんとなく元々のスタッフの方のOSも変わつてきたんですか。

宮城 ここが難しいんですけれど。パーラー公民館のスタッフが、最初は非常勤で雇用していたんだけど、やがて若狭公民館のスタッフになつたんです。そうなるのと、今度は「いわゆる公民館スタッフ」としての振る舞いを始めたんですよ。でも口酸っぱく言つていくと、だんだん思い出してくる。自分が先走つてやつても形にならない、なんか違う、という経験してるから、感覚つかめてきている気はしますね。経験が大きいのかな。

福澤 多文化共生の部分で、生活、背景、いろんなことを知らない皆さんからの相談を受け止

めて、ほぼフルオープンで応えてらっしゃるじゃないですか。断ることはないのかな？と(笑)。

宮城 これは結構大事なポイントだと思うんですけど、断ることほとんどないんですよ。断らないんだけど、棚上げしたままのものはいっぱいあります(笑)。うんうんつて聞くんですけど、やるもやらないも言わずに承つている状態にしている。2年後ぐらいに何か思いついて動き出すことはあるんですけど。私に相談したあとに、なにもないなと思つてモヤモヤしてる人たちはたくさんいるはずですよ。

野村 今伺つてきたこの若狭公民館の活動は「相談した側の動機で動き出したことを追いかけていく」という関わり方が多いと思うんですよね。まず、支援され

る側の主体性が引き出されて、そこに、支援する側がついていく、つていう順番になつていて。その最初で「支援される側の主体性」がちゃんと出てこない、追いかける側に回れないので、制度で書かれてる公民館スタッフとしての振る舞い、硬直した支援になつたりとかする、という。

宮城 私たちに「やつてほしい」つていう感じの話を持つてこられる方が多いんですが、それは乗れないんですね。「やる気満々だけどどうしていいか分からない」とか、「ちよつと後押しが必要」つていうものに対しては、「一緒に動きましょう、つてできるんですけど」、「公民館に言つたらやつてくれるんじゃないの」「私たちの支援をしてよ」みたいなものに関して、棚上げたままつていうことが多いですね。

野村 信州アーツカウンスルとして、自分たちの活動の説明や、支援している団体の説明をするときに、「新しいコミュニティの形成に関わつていく」つていうような言い方をすることがあります。それは「コミュニティを新たに つくる」つていう意味と、「コミュニティそのものの新しいあり方を つくる」つていう意味の両方があると私は思つています。

まとめ

野村 信州アーツカウンスルとして、自分たちの活動の説明や、支援している団体の説明をするときに、「新しいコミュニティの形成に関わつていく」つていうような言い方をすることがあります。それは「コミュニティを新たに つくる」つていう意味と、「コミュニティそのものの新しいあり方を つくる」つていう意味の両方があると私は思つています。

長野県にはいろんな自治組織があつて、公民館活動も盛んだと言うんですが、その仕組み自体が全体的に高齢化して、後継ぎが居ない、移住してきた人と共有するとういうような状況が訪れてるし、いま 50代以下の年代の中にはそういうのが嫌で地元と距離取りたいという人も居ると思います。



令和7年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業



信州アーツカウンスル
一般財団法人 長野県文化振興事業団

長野県

発行日 | 2026.3.15

編集 | 加藤重将、野村政之

デザイン | 北林南

協力 | 犀の角印刷所